

極早生エンバク新旧品種対決 「スーパーハヤテ隼」対「ウルトラハヤテ韋駄天」 — 品種の特性とその利用方法について —

1. はじめに

エンバクは他の麦類に比べ、比較的土壌を選ばず栽培しやすいことや、耐寒性や耐雪性は劣るものの、晩夏播き、秋播き、春播き、混播といった幅広い作型や使い方に適応することなどから、イタリアンライグラスと並ぶ秋冬の代表的な飼料作物として人気があります。作型の中でも、極早生品種を晩夏（東南北部8月下旬、一般地8月下旬～9月中旬、西南暖地9月上旬～下旬）に播種し、年内に出穂させ、12月～1月に収穫する作型は、早播きのデントコーンの裏作として相性が良く、また飼料が不足がちになる冬期に良質の粗飼料が確保できることから、特に西南暖地において広く普及している体系です。

この晩夏播きの体系に適応する極早生の品種として、現在弊社は「スーパーハヤテ隼」、「ウルトラハヤテ韋駄天」という2品種を販売しています。いずれも自信をもってお奨めする品種ですが、農家の皆様にそれぞれの品種の特性をより深く理解していただけるよう、今回は両者を対決形式でご紹介し、品種を選ぶ際に役立てていただきたいと思います。

2. 品種紹介

まずは各品種の特性を簡単にご紹介し、その後各特性ごとに詳しく違いを説明します。なお、それぞれの品種特性を比較したものを表1にまとめましたので、そちらもご参照ください。

1) スーパーハヤテ隼 (写真1)

「スーパーハヤテ隼」(以下ハヤブサ)は、平成3年に「ハヤテ」の後継品種として弊社で育成されて以来、極早生エンバクの代表選手として長くご愛用いただいております。安定した年内出穂と高い収量性が

特徴です。耐病性・耐倒伏性では後発品種に譲るものの、収量性については現在も流通している極早生

表1 「ハヤブサ」「イダテン」の特性比較表

スーパーハヤテ隼 やや開帳型、ポリウム やや太茎、多葉	草姿 茎・葉	ウルトラハヤテ韋駄天 極めて立型、スリム 細茎、やや少葉
★★★	出穂	★★★
★★	耐病性	★★★
★★	耐倒伏性	★★★
★★★	収量性	★★
★★★	晩夏播き	★★★
★	秋播き	★★★
★★★	春播き	★★
★★	混播適性	★★★

★：中程度、★★：良い、★★★：極めて良い
※エンバク2品種間の相対評価であり、当社カタログと一部表現が異なります。



写真1 「スーパーハヤテ隼」の草姿

品種の中でトップクラスであり、長年の実績と信頼で確固たる地位を築いている品種です。

2) ウルトラハヤテ韋駄天 (写真2)



写真2 「ウルトラハヤテ 韋駄天」の草姿

「ウルトラハヤテ韋駄天」(以下イダテン)は、ハヤブサに冠さび病抵抗性品種「サビツヨシ」を交配し、平成20年に弊社で育成された品種です。安定した年内出穂、高い収量性はそのままに、更に耐病性・耐倒伏性を兼ね備え、様々な作型で利用できるバランスの良い品種です。また細莖で極めて立型のスマートな草姿も人気の品種です。

第1R 出穂

晩夏播きで用いる極早生品種には、多少の気象の変化があっても、安定して年内に出穂することが不可欠です。最近、従来の極早生品種より1週間以上も出穂が早い、超極早生、あるいは超々極早生と言われる品種も発売されており、出穂が早いことは利点でもありますが、播種期や気象条件によっては短程のままで出穂が始まってしまい、低収となる恐れがあります。

私たちは安定・多収が重要であると考えており、その点においてハヤブサおよびイダテンは、いずれ

も西南暖地では9月下旬、一般地でも9月中旬までの播種で安定して年内に出穂し、十分な収量が確保されることがこれまでの試験結果より確認されており、出穂の早さと収量性のバランスがとれた丁度良い熟期の品種です。

第2R 耐病性・耐倒伏性

晩夏播きのエンバクの重要病害の1つに、「冠さび病」が挙げられます。冠さび病は関東以西の温暖な地域で発生が多く、激発すると枯れ上がり、収量の減少や飼料価値の低下を招きます。ハヤブサ、イダテンともにこの病害には比較的強い品種ですが、ハヤブサについては極端な早播きや長雨、残暑が長く続くといった気象条件によっては発生が見られるため、特に西南暖地では注意が必要です。一方のイダテンはこの病害に極めて強く、ほとんど発生は見られません。耐病性についてはイダテンに軍配が上がると言えます。

また、イダテンは耐倒伏性についてより重点をおいて育成された品種であり、これについてもハヤブサより優れており、極めて立型の草姿と相まって刈取時のロスが少ない品種です。

第3R 収量

図1に、弊社宮崎研究農場および千葉研究農場における平成21年度と平成22年度の乾物収量成績の平均値を示しました。宮崎と千葉のいずれにおいても、またいずれの播種期においても、ハヤブサおよ

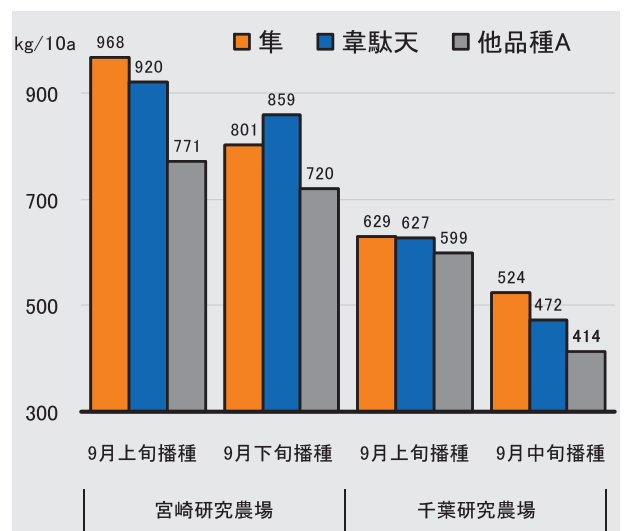


図1 乾物収量成績 雪印種苗(株) 平成21、22年度平均

びイダテンは他品種Aよりも多収という結果がでており、どちらの品種も収量性が非常に優れていることがわかっていただけるかと思います。とりわけハヤブサは、宮崎の9月下旬播きを除きイダテンと同等かやや上回っており、この高い収量性こそが、発売から20年経った現在でもハヤブサが支持される最大の理由であると考えています。特に病害や倒伏の発生が比較的少ない関東地方などでは、収量性の高いハヤブサは人気があります。

第4R その他（作型、混播適性）

極早生品種であるハヤブサ、イダテンは主に晩夏播き-年内収穫の作型で多く利用される品種ですが、その他の作型でも利用でき、高い能力を発揮します。

1) 秋播き

エンバクの秋播き栽培は、一般地では10月中旬～11月上旬、西南暖地では11月上旬～下旬に播種し、翌年の4月～5月に収穫する作付体系で、単播での収量は全ての作型の中で最も多く、また糊熟～黄熟期まで生育を進めることで、ホールクロップサイレージを調製することも可能です。ハヤブサ、イダテン共に秋播き体系でも利用することができますが、春に発生しやすい葉枯れ病や霜害に強い傾向が認められるイダテンを秋播きではお奨めします。なお、寒冷地や積雪地帯ではエンバクの越冬利用はできないので、越冬性の良いライムギの利用をお奨めします。

2) 春播き

エンバクの春播き栽培は、一般地では3月上旬～4月上旬、西南暖地では2月中旬～3月中旬、また東北や寒高齢地では3月下旬から5月上旬に播種する作付体系で、播種から短期間で収穫できることや、予乾が早い、倒伏の発生が少ないといったメリットがあります。一方で、播種が遅くなり気温が上昇してくると、短程で出穂し低収となることがあるので、多収を狙うにはその地域の中でもなるべく早い時期の播種をお奨めします。この作型ではハヤブサ、イダテン共にお奨めですが、倒伏にやや難があるハヤブサも、この作型であれば倒伏させずに収穫できるのでお奨めです。

3) 混播

エンバクは単播だけでなく、他の草種と混播する

ことでより高い能力を発揮します。代表的な例として、晩夏播き（一般地9月上旬～中旬、西南暖地9月中旬～下旬）でのイタリアンライグラスとの混播が挙げられます。この作型では、年内にエンバクを主体に収穫し、翌春にイタリアンの2番草を収穫することで、1回の播種で収穫が2回できます。更にそれぞれを単播した場合よりも倒伏が軽減される、雑草の侵入が少ない、エンバク刈取後の反転時に、地際にイタリアンが繁茂しているため土つきが少ない、といったメリットが生まれます。

他に、西南暖地では2月下旬から3月中旬にローズグラスを同時播きし、5月にエンバクを収穫した後、既に発芽して生育が始まっているローズグラスを利用するという省力的な技術が広がりつつあります。ハヤブサ、イダテン共に混播に利用することができますが、とりわけイダテンは直立型で葉がそれほど多くないことから、日光の透過性が良く、混播相手を抑圧しないため、より混播に向いていると思われる。

3. おわりに

これまで弊社のエンバク極早生品種ハヤブサとイダテンについて、特性ごとに比較しその違いを述べてきました。まとめると、晩夏播き栽培で重要な年内出穂性は両品種とも優れており、耐病性、耐倒伏性はイダテンが優れ、収量性では僅差ですがハヤブサが優れていました。総合的に見れば、各特性のバランスが取れており、晩夏播き以外の作型や混播でも安定した能力を発揮する**新品種イダテン**が優れているように思われますが、ハヤブサの収量性の高さも捨てがたいものがありますので、あとは農家の皆様の好みや作型に合わせて、より良いと思われる品種を選んでいただきたいと思います。また、私どもはこれらの品種に満足することなく、今後もより能力の高い品種の開発を目指して尽力してまいります。